



真田さんがスマートフォンで撮影した作付け前のカライモ畑の風景



上 / 植物をモチーフに幸子さんが手彫りした木彫のトレイ
右 / 充実した日々を送っているという、真田さん夫婦



カライモといえば、福田グラウンドの入り口にある無人販売の棚には、紅はるかのカライモが1袋100円で販売されています。栽培しているのは木田伸一さんとあけみさん夫婦です。

あけみさんの実家の家業を引き継いだ木田さん夫婦は、益城から大津まで通い畑仕事に汗を流しています。「今は苗作りの時期。収穫は秋です。販売しているカライモは、去年収穫して貯蔵庫にじっくり寝かせたものです。『食べるにも料理するにも小ぶりがいい』という声が多いので、少し小さめのものをそろえて



仲良く写真撮影に応じてくれた木田さん夫婦

「重労働の仕事は私の担当。二人でがんばっています」と伸一さんが言葉を添えます。「娘家族がやってくるのが楽しみです」と口をそろえる二人。週末には仲の良い家族と、にぎやかで楽しいひとときを過ごしているそうです。



福田市民グラウンドの入り口にある無人販売棚には、紅はるかが並べられています

グラウンドゴルフで出会った真田さんの趣味は、写真撮影。本紙「Photography」のコーナーにも投稿しているそうです。「昔から写真を撮るのが好きでね。広報紙に投稿する写真はスマートフォンで撮っています。自分の魅力をお宝として発見できるし、撮影スポットを探しに出かけるのも楽しみにしました」と話す真田さんが、携帯電話の待ち受け画面にしている一枚があります。小谷地区のカライモ畑を撮影した写真です。

春を写す人、春を暮らす人

「カライモの植え付けの準備が整ったこの風景は、春の時期にしか見られんとです」と真田さん。大地に整然と並ぶ黒い畝が、美しいストラップ模様を描いています。そこには、カライモ農家さんの丁寧な仕事ぶりも写し出されています。「お茶をどうぞ」と笑顔で顔を出

してくれたのは、妻の幸子さん。茶器に乗せた木の温もりが伝わる彫り模様のすてきなトレイは、幸子さんの手作りだそうです。「木彫を習っていたね。なーん、人様に見えるようなもんじゃなかって」と照れ笑いを浮かべます。

地震を乗り越えて家を再建し、2世帯3代の家族が暮らす真田家。「台所も風呂も別。この関係がちょうどよか」と、家族がほぐれ距離感を保ちながら、幸せに暮らす毎日がそこにありました。

土の恵みをひと袋に詰めて



上 / 毎週、月・木曜日に福田市民グラウンドに集まり、グラウンドゴルフを楽しんでいる地域の皆さん



左 / 高さのあるバックネットは、村上少年の柵越えに備えて、後に整備されたものだそうです

メジャーへとつながった町のグラウンド

すっかり春になりましたね。散歩にはうつつつけの、気持ちのいい季節の到来です。早朝の福田市民グラウンドでは、地域の皆さんが元気にグラウンドゴルフを楽しんでいます。ちよつとのぞいてみると…。

「何かの取材かいた？」「おー、わがまち散歩かい？」「こんだ（今度は）田中な？」「うつつたつて（おしやれして）来なおそか？」「あら？ あた…、どつ

「矢継ぎ早の質問攻めに思わず苦笑い。とにかく元気で明るい皆さんは、毎週月・木曜日の朝からここに集い、ボールを追いかけられるのが何よりの楽しみだそうです。」

さて、このグラウンドは、熊本出身のメジャーリーガーを育てた場所としても知られています。今春、MLBシカゴ・ホワイトソックスへの入団が決まった、元東京ヤクルトスワローズの村上宗隆選手が、リトルシニア時代（中学生のころ）に、ここを練習場としていました。

グラウンドには高さの違う二重のバックネットが設けられています。規格外ともいえる村上少年の打球を受け止めるために、後から高く整備されたものだそうです。「なんさま村上選手が打ったボールがネットを越えて飛んでいきよつた」と澤渡輝雄さん。「練習が終わっても『監督、もう一本』で食らいついていたね。他の子とはだんとつ違つた」と、当時の練習の様子を見守ってきた真田昇さんは振り返ります。後ろに山林を臨む、のどかなこのグラウンド。今では「聖地」とも呼ばれ、村上選手の活躍にあやからうと県内外から野球少年たちが訪れるそうです。

ちよつとそこまで！

わがまち散歩

Wagamachi Sanpo

vol.58
たなか田中編

のどかな風景が広がる田中地区。道路沿いに家々が並び、辺りは田んぼや山林に囲まれた自然豊かな集落です。春のやわらかい風に包まれながら、歩くほどに、出会うほどに人の温かさを感じ、さきに包まれる散歩となりました。